

2019 年度（第 39 期）

ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業

ジュニアリーダー育成グループ研修

（視覚障害者ユースプログラム）

報告書



RNIBにて

ジュニアリーダー育成グループ研修 報告書

目次

1	はじめに.....	1
2	研修テーマ	2
3	日程	2
4	参加者.....	3
5	研修の目的	4
6	研修内容.....	6
1)	ホームステイ.....	6
2)	野外活動.....	10
3)	異文化交流パーティー.....	12
4)	タッチ・ツアー.....	16
5)	イギリスのインクルーシブ教育.....	20
6)	RNIB 訪問	22
7)	在英国日本大使館訪問.....	25
8)	視覚障害者リーダーを訪ねて.....	26
9)	各国の料理.....	28
7	研修のまとめ（研修生）	29
8	研修のまとめ（引率スタッフ）	35
9	おわりに.....	40

1 はじめに

ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業実行委員
筑波大学附属視覚特別支援学校 高等部教諭
青松利明



2019年8月1日から8月10日まで、イギリスにおいて視覚障害のある高校生を対象に10日間の研修プログラムを実施しました。この冊子はその研修報告書です。

この研修は、公益財団法人ダスキン愛の輪基金が視覚障害者を対象に2014年に初めて行ったジュニアプログラムの第3弾として実施されました。2018年秋に募集がおこなわれ、2019年1月の書類選考、3月の面接審査・健康チェックを経て、東京都立文京盲学校、横浜市立盲特別支援学校、筑波大学附属視覚特別支援学校から4名の生徒が研修生として選抜されました。また、引率スタッフとしては研修の通訳や誘導をするために4名のスタッフ、健康管理をおこなう医師1名、全体の統括をおこなうアドバイザーとして筆者が参加することになりました。

3月には、ダスキン愛の輪基金が実施する他の障害者海外派遣プログラムと合同で2日間のオリエンテーションをおこないました。また、5月～7月には事前準備勉強会を3回おこないました。勉強会を通じて、研修テーマを理解するとともに、イギリスにおける視覚障害者を取り巻く状況についての事前学習、研修内容についての意見交換、イギリスの若い視覚障害者との交流会でのプログラムの検討、研修生・スタッフの役割分担等をおこないました。また、メーリングリストを作成し、直前の情報交換に活用しました。

7月31日の21時には全員元気に羽田空港に集まり、期待と不安の中、出発しました。フランクフルトを経由し、無事にマンチェスターに到着しました。前回の研修では2名の荷物が届かずその後2日間は気をもむことになりましたが、今回は全員の荷物が無事に到着しましたので、スタッフはほっと胸をなでおろしました。

研修の前半は、元オールダム教育局 特別なニーズ支援部視覚・運動障害児チーム代表のKay Wrench（ケイ・レンチ）先生ご夫妻が宿泊施設と一緒に泊まり込んでくださり、コーディネートをしてくださいました。また後半は、RNIB（英国盲人協会）のRajni Chandegra（ラジニ・チャンデグラ）氏、在英国日本国大使館一等書記官の佐野壽則氏、岸本哲也氏にプログラムコーディネートの協力をいただき、研修を実施することができました。宿泊は、前半が野外教育センターとホームステイ、後半が大学の学生寮でした。前半は自然豊かな地方に、後半は大都市に滞在しながら、視覚障害当事者やその関係者との交流、イギリス文化の体験、教育、芸術、アクセシビリティに関する学習等、多岐に渡る研修をおこないました。

この報告書では、研修テーマ、日程、研修生・スタッフ一覧、各研修生の目標、研修生

による研修内容の報告、各研修生・スタッフのまとめを掲載しています。報告書を通じて、研修生が学んだことを読者のみなさまにも知っていただき、この研修の意義をご理解いただけることを期待しております。

2 研修テーマ

- ①日常生活・情報・文化・教育・就労等における障害者のアクセシビリティについて
- ②障害者の自立に向けた努力や取り組み
- ③障害者リーダーの活動状況や想い
- ④異文化体験
- ⑤自立への意識・コミュニケーション力・他人への思いやり・リーダーシップ等の向上

3 日程

7月31日（水）

羽田空港集合

8月1日（木）

羽田空港発

現地着

キャッスルショウ野外活動センター館内オリエンテーション

アイスブレイク

スコーン作り体験（Jane Walker 氏）

8月2日（金）

オールダムとインクルーシブ教育講義（Kay Wrench 先生）

国立炭鉱博物館見学

現地に生息する動物剥製の触察（Ian Wrench 先生）

8月3日（土）

ウォールクライミング、ポールクライミング等の野外活動（センターインストラクター）

ECL0（眼科における患者支援担当）との懇談（Alba De Toro Nozal 氏）

異文化交流パーティー

8月4日（日）

ホームステイ

・David Stainsbury 家：近藤

・Linda and Bill Best 家：坂本

・Kay and Ian Wrench：廣田、野呂

8月5日（月）

ロンドンへ移動

大英博物館 エジプトギャラリータッチ・ツアー

8月6日（火）

RNIB 訪問

支援機器・用品販売所見学

公共政策部長からの講義（Eleanor Thompson 氏）

支援技術とデジタルインクルージョン担当からの講義 (Gary Brunskill 氏)

企業連携・技術革新担当からの講義 (Marc Powell 氏)

雇用部長からの講義 (Kudirat Adeniyi 氏)

8月7日 (水)

セントポール大聖堂タッチ・ツアー

日本大使館訪問

パラリンピック金メダリストとの懇談 (Noel Thatcher 氏)

一等書記官との懇談 (佐野壽則氏、岸本哲也氏)

アフタヌーンティー体験 レストラン職員による解説付き (Capital Hotel)

8月8日 (木)

ケンブリッジ大学障害学生リソースセンターでの講義 (Helen Duncan 氏、Aless McCann 氏)

ケンブリッジ散策 (マーケット・スクエア、スーパー、数学橋 等)

ミーティング (ふりかえり)

8月9日 (金)

ミーティング (報告書にむけて)

現地発

8月10日 (土)

帰国、解散

4 参加者

1) 研修生

①近藤 悠斗 (こんどう ゆうと) 筑波大学附属視覚特別支援学校高等部2年

②坂本 奈々美 (さかもと ななみ) 筑波大学附属視覚特別支援学校高等部2年

③野呂 美遥 (のろ みはる) 東京都立文京盲学校高等部普通科2年

④廣田 成美 (ひろた なるみ) 横浜市立盲特別支援学校高等部普通科2年

2) スタッフ

①青島 優 (あおしま まさる) 旭川キュアメディクス 医師

②石川 英司 (いしかわ えいじ) 城西大学語学教育センター

③佐藤 紀子 (さとう のりこ) 日本大学歯学部健康科学

④松崎 茜 (まつざき あかね) 全国高等学校長協会入試点訳事業部

⑤宮崎 晶子 (みやざき あきこ) 通訳者

3) アドバイザー

青松 利明 (あおまつ としあき) 筑波大附属視覚特別支援学校高等部

5 研修の目的

1) 近藤 悠斗

この研修で私には三つの目標がありました。

①イギリスの視覚障害教育について学びたい

私は、数学・理科に興味があり、現在は、大学で数学を学びたいと考えています。しかし、理系科目は、多くの視覚的な情報や実験などの視覚に頼った実習から、困難な点が多いのが現状です。大学で専攻するのが難しいこともあります。また、視覚障害生徒



は、文系の生徒が理系の生徒よりも圧倒的に多く、視覚障害による理系科目を学習する難しさがその一因となっていることが想像できます。発展途上国などでも、視覚障害者の理系教育は、多くの問題を抱えています。視覚障害があっても、自分で実験をして、一般の学生と同じように学べるということは広く認知されていません。私は、将来この現状を改善するために、自分にできることをしていきたいと考えています。この研修では、イギリスの視覚障害教育について学び、私が今後取り組む具体的な目標を探したいです。

②異文化を体験したい

イギリスの考え方・価値観に触れ、自分の考え方を広げたいです。

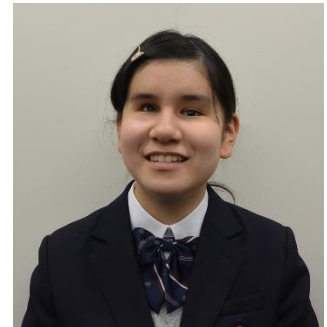
③実際の英語を体感したい

実際に生活の中で使われている英語を体験することで、自分の英語がどの程度通用し、どの程度理解できるのか体感し、今後の英語学習に繋げていきたいです。

2) 坂本 奈々美

この研修に応募しようと思った最初のきっかけは、前回の研修に参加された先輩の姿を見て、海外に興味を持っているなら、直接その状況を知ることが大切だと思ったからでした。そして、参加させて頂くにあたり、私は大きな二つの目標を設定しました。

一つ目は、イギリスのインクルーシブ教育について知ることです。



私はずっと盲学校で学んできたので、通常学校の状況に興味がありました。盲学校は専門性の高い教育を受けられるのでとても良い環境ですが、晴眼者との関わりが極めて少ないなどの課題もあると思います。課題を克服しながら良さも失わないためにはどのような方法が良いのか考えていた時、イギリスはインクルーシブ教育を積極的に取り入れていると知りました。専門性を維持しつつ、通常学校の中で学べる環境はとても魅力的に映りました。そのため、イギリスのインクルーシブ教育について直接話を聞くことで、日本の視覚障害者教育の今後を当事者として考える上で役立てたいと思いました。

二つ目は、イギリスの視覚障害者とたくさん話し、異文化交流をすることです。

私は英語が好きで、言葉が伝わるのが嬉しくて勉強を続けてきました。この研修では、積極的にコミュニケーションをとって仲良くなったり、小さな文化の違いに気づいたりしたいと考えました。また異文化交流に関しては、イギリスの文化を知るだけでなく、日本の文化やスポーツを伝えたいという思いがありました。その中で最も行いたかったことが、「フロアバレーボール」の紹介でした。日本の盲学校では広く知られていても、海外では全く知られていないこのスポーツの魅力を少しでも伝え、興味を持ってもらいたいと思いました。

このような目的を持って私はこの研修に参加させて頂きました。

3) 野呂 美遥

今回私には主に二つの目的がありました。

一つ目はイギリスにおける視覚障害者がどのようにして健常者とともにリーダーとして活躍されているのかを学ぶという目的でした。その目的の理由として、現在日本では、視覚障害者の職業といえば鍼灸という専門職がありますが、イギリスではそのような職業はあるのかということに大変興味があったからです。また、日本とイギリスでの障害者に対する援助や職業サポートの違い、それぞれの国での障害者の職業教育制度などについて、障害者の先輩の体験談や講義を通して、比較したいとも考えていました。



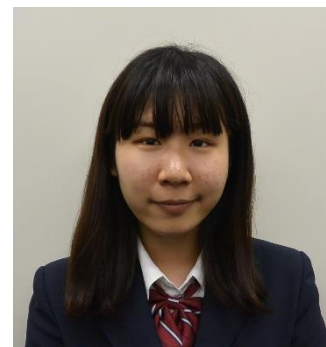
二つめは異文化交流パーティーやホームステイなどを通して日本文化を紹介し、同時にイギリス文化にも触れるという目的でした。私は本や学校の授業などから、日本とイギリスでは、礼儀や挨拶、振る舞いを大切にすることや、お茶を飲む習慣があることなど、共通点も多いということを知り、異文化交流や他国の文化に興味を持ちました。そのため、実際にイギリスで、アフタヌーンティーやイギリス料理を食べるなどの体験をして、是非とも体全体で文化を吸収していきたいと思いました。また、イギリス文化を実際に体験するだけでなく、帰国後に今度は私が学んだことを多くの人に発信していきたいので、日本とイギリスの文化の違いも確かめたいと考えていました。

他にも、イギリスの公共福祉やインクルーシブ教育、そして障害者福祉制度について学習し、自分の将来の選択肢の幅を広げるといった目的もあり、このジュニアリーダー育成グループ研修に応募させて頂きました。

4) 廣田 成美

研修の目的は大きく分けて二つありました。

一つは将来の選択肢を増やすためです。私は以前自分の見え方のことと将来のことで悩んでいました。どうしても目が見えづらいという理由で何事にも一歩を踏み出すことができず、持っていた夢も諦めていました。イギリス研修という機会を頂ければ、視覚障害者がどのような仕事をし、どのように社会に貢献しているのか知ることができると考えました。自分自信の世界観を広げ、たくさんの方のことを吸収したいと思ったことが研修に応募した一番のきっかけでした。



もう一つの理由はパラリンピックの原点であるイギリスで、パラリンピックの歴史や国全体のパラスポーツに対する取り組みを知り、日本でも活かせるヒントを聞きたいと思ったからです。そしてフロアバレーボールというインクルーシブスポーツの魅力を、イギリスの人にも知ってもらいたいと思ったからです。フロアバレーボールは日本でしか行われていないスポーツなので、将来世界各国でフロアバレーが広まるための第一歩だと考えました。

これらが、私がこの研修に応募させていただいた目的です。

6 研修内容

1) ホームステイ

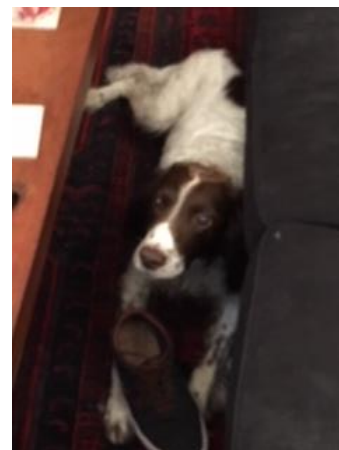
(1) 近藤 悠斗

私は、David さんのご家庭にホームステイをさせて頂きました。まず、David さんの車で一時間ほどかけて York に行きました。そこでは、Viking の博物館を見学しました。Viking は、10 世紀ごろに北アイルランド地方などを支配した民族です。貨幣や武器など様々な展示がありました。ゴンドラに乗って、Viking 時代の街の中をゆっくり探索するツアーがあり、間近でにおいや人々の



の生活の音も聞くことができました。当時の人を再現したロボットが多数配置されていて動いており、実際に Viking 時代にタイムスリップしたような感覚を味わいながら、歴史を学ぶことができました。とてもユニークで面白い展示の方法だと感じました。そのあと、貨幣について博物館の方の解説を聞きました。英語が速くてほとんど分からなかったですが、情熱や面白さはよく伝わってきて、わくわくしました。発掘調査の体験コーナーもあり、私も実際にやってみました。掘っていくと、教会の階段や人骨のレプリカがでてきて、考古学の発見を身近に感じられました。

家に戻ってから、一緒に夕食を作りました。献立は、焼いた人参、さつまいも、じゃがいも、アメリカボウフウ、蒸したブロッコリーとローストチキンです。アメリカボウフウは、白い人参のような野菜で、初めて食べましたが、甘くて、おいしかったです。それから、ペットの犬の Basil の散歩で公園に行きました。夜の公園は、とても穏やかで、落ち着きました。

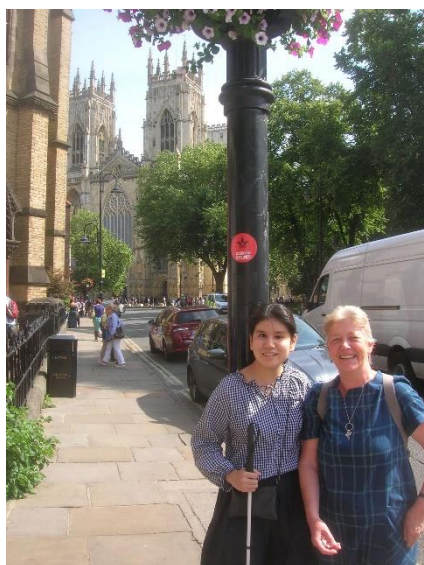


York に往復する車の中や食事の時などには、日本やイギリスについていろいろな話をしました。日本とイギリスの歴史や大学教育、普段の食事のことなどについて話しました。似ているところも違っているところもとても新鮮でした。英語が伝わらないこともありましたが、聞き返したり、知っている単語で頑張って説明したりしながら、楽しく過ごすことができました。私がアレルギーについて説明できずに困っていると、David さんが携帯電話で料理に入っている魚の名前を翻訳して日本語のローマ字を読んで下さり、食べられないものが入っていないことを確認することができ、とても助かりました。一生懸命伝えようとして下さったことが本当に嬉しかったです。

もっと長くいたいと思うほど、ホームステイは充実していて、あっという間に時間が過ぎていきました、David さんと Basil と過ごした時間は、私にとって本当に大切なものになりました。

(2) 坂本 奈々美

ホームステイでは、ご夫婦二人で生活されている方々にお世話になりました。まず、ヨークという産業革命時に栄えたとても古い街に向かいました。ヨークに着いて最初に行ったミンスターヨークというとても大きな教会が最も印象に残っています。



この教会ではちょうど礼拝をしているところでしたが、私はホストファミリーと一緒に途中から讃美歌を聞くことができました。荘厳な雰囲気の中、優しい音色が美しく響き渡る空間に入ると、とても神聖な気持ちになりました。私はキリスト教についての知識はほとんどありませんし、讃美歌の間に朗読されていた聖書の内容は、理解する以前に何を言っているかも分かりませんでした。しかし、たくさんの方が祈りを捧げている場に参加させて頂き、様子を感じられたことで、他の人を支えているものを受け入れ、大切にすることが相手を理解すること、さらにはそれが

お互いが仲良くなる懸け橋になるのだと思いました。

また、教会には点字の案内図を纏めた本と立体模型があり、色々な角度から見た教会の形やステンドグラスの模様を知ることができました。ヨークでよくみられるバラの模様も描かれており、触っているとどんどんこの教会の魅力に引き込まれて行くようでした。案内図を触ったことから、ホストファミリー



と点字についても話せたので、このような配慮がありとても嬉しかったです。

教会へ行った後は、ヨークの町中を散策したり、バイキングについての博物館で当時の様子を再現した場所を乗り物に乗って巡ったりしました。町中には音楽を奏でている人がたくさんいて、自由の中に落ち着いた和やかな雰囲気もある良い場所だと思いました。ディズニーやハリーポッターのショップに入った時には、世界中で愛されている物のすごさも感じました。そして博物館では、日本語のガイドで理解を深められましたが、学芸員の方の情熱的な説明の速さにはなかなかついて行けなかったのもっと正確に英語を聞き取れるようになりたいとつくづく思いました。

ホームステイ先の家では、築200年の建物を改築しながら大切に使うところや、庭が広くて鶏がいるところなど、日本とは違う家庭の様子に触れる機会がたくさんあり、体験して初めて分かることにたくさん出会いました。食後にコーヒーを飲みながら英語のアクセントについての話を聞いたことはとても良い思い出です。

このホームステイでは、歩いている時も家の中でもホストマザーが周りの様子を説明してくれ、安心して過ごすことができました。そして、出かけている時には、多くの人々の優しさに触れられました。また、聞き返すことは何度もあっても、通訳を介さず一日英語で会話できたことは、私に自信とモチベーションを与えてくれました。このホームステイで私はイギリスがますます好きになり、再び訪れたいと思いました。

(3) 野呂 美遥

8月4日から8月5日まで、今回この研修のサポートをして下さったケイ先生の家ホームステイをしました。

このホームステイには現地の高校生のモーリーちゃんという女の子も一緒に参加してくれました。

日本のお土産として、葛飾北斎のコースターとインスタントの味噌汁を持参しました。コースターの説明をする時は、説明が難しく戸惑ってしまいましたが、味噌汁についてはうまく説明ができ、とても喜んでくれたことを嬉しく思いました。

このホームステイで印象に残った事は私に熱意を持って接して下さった事でした。

彫刻公園といって、羊がたくさんいる公園に行った時、様々な彫刻を触らせてくれたり、触ってはいけないと言われていた彫刻を内緒でと言って触らせてくれたりして一緒に喜びを共有しようという熱意が伝わってきて、なんて温かい人たちなんだろうと嬉しくなりました。

私たちへの皆さんの配慮もとても嬉しかったです。例えば、モーリーちゃんが私のために公園や家の中などで手引きをしてくれたり、彫刻の説明をしてくれたりしました。また、パスタを作るために家の庭から野菜を取ったのですが、その時も先生が「これ触ってみて。バジルの匂いがするでしょ？」とか「もう少しで階段だから気をつけて」など、私たちのことをいつも気にかけて下さいました。



日本の学校について話した時も“cool”と言ってくれたり、たとえ英語を間違えてしまっても一生懸命に耳を傾けてくれたり、「英語すごいわね」と褒めて下さったので、自分に自信を持つことができるようになりました。人のことを褒めたり、相手の意見を尊重したりする事は、イギリスならではの文化であると感じました。



今回このホームステイでは、日本とイギリスの違いを学ぶだけでなく、イギリス人の国民性や、みんなで協力することの大切さ、相手の意見を尊重しながら話を聞くことの大切さを、改めて実感することができ、自分を変えるきっかけにすることができました。

この経験を生かして、私も人の意見をしっかり尊重しつつも自分の意見を発信できる人間になりたいと強く思いました。

(4) 廣田 成美

私は、今回の研修をコーディネートをして下さったレンチ先生ご夫妻の家にホームステイをさせて頂きました。

まず家に着いたとき、欧米の国々の習慣である靴を脱がないで家に入ることや、お庭がとても広いことにとっても驚き、新鮮に感じました。



お土産として持っていった日本の和菓子や扇子、お寿司のキーホルダーを渡したとき、とても喜んで下さって嬉しかったです。とくに“Thank you”という時にハグをしてもらったり、何度も“Thank you”と言ってもらえたりなど、日本とは少し違う感謝の気持ちの表し方に魅力を感じました。

ホームステイはご夫妻だけでなく、モーリーちゃんという私と同年の女の子とも一緒に過ごすことができました。ホームステイは他の活動に比べて英語で会話ができる機会が多かったです。温かいホストファミリーの方々と会話することで、英語の魅力をも身をもって感じることができました。例を挙げると、人を褒める言葉がたくさんあるということです。何気ない会話の中でも、“cool! (いいね!)”、“great”、“nice”、“excellent”などの言葉をたくさん使っていました。このような言葉を聞くだけでも、会話がとても楽しくなり、たとえ英語が通じなくても一緒に笑いあうことができました。

そしてもう一つ印象に残っているのが、ホストファミリーの皆さんの気遣いです。見えない、見えにくいものがあった時、その紹介を分かりやすく説明して下さったり、段差や暗い場所になった時に声をかけて下さったりと、常に気遣いをして下さいました。私はそんなホストファミリーの皆さんをととても尊敬しています。

このホームステイはホストファミリーの皆さんの温かみを感じながら、イギリスの習慣、英語の魅力を感じられるとても充実した楽しい経験でした。



2) 野外活動

キャッスルショウ三日目。私たちは野外活動でクライミングに挑戦しました。

研修生と引率スタッフの皆さん、そして視覚障害を持つブラッドリー君・ウィリアム君兄弟も一緒でした。各自が命綱を付けるハーネスという器具を装着すると、いよいよ屋外へ。そこには、難易度別に3種類のコースが設置された高さ10メートルの壁が待ち受けていました。

クライミングをする際には、一人のクライマーと二人のサポーターが必要です。クライマーが壁につけられた突起を伝って上に登った分だけ、一人がハーネスに繋いだロープを引っ張り、もう一人がさらにそれを引いてたゆまないようにすることで安全を確保できます。

私にとって、クライミングは初めての体験でしたが、不思議と怖さは全く感じず、もっと上に行きたい、さらに高く登りたいという気持ちが湧いてきました。こう思えたのは、みんなで助け合いながら、声を掛け合いながら取り組めたからだと思います。私たちは、誰かが登っている時、何度も「がんばれ！」と声を掛け合いました。次の突起をうまく見つけられず、これ以上先へは進めないかも、、、と思った時でも、その声掛けに背



を押されて、再び冒険心が掻き立てられました。全員が一度ずつ登るだけでなく、何人かは3コース全てで頂上へ到達するなど、それぞれのペースで楽しむことができました。

昼食を終えると、次は棒登りに挑戦しました。鉄の棒や突起が付きだした柱を登り、頂上のプラットフォーム(約50cm四方)に立つという何ともスリリングな経験でした。

私は、すでに一人が頂上に立っているところを登って行きました。登るだけなら壁より簡単でしたが、カタカタと揺れる頂上に立つ時には足がすくみました。立っているところに下から人が登って来るのもかなりハラハラしたと思います。しかし、何とかよじ登り、二人で支えあいながらしっかりと立った時、自然に笑顔になり、達成感と安堵感に包まれました。

最後は、四角い籠をいくつも上に積み上げていき、その上に登って立つというアクティビティに挑戦しました。常に命綱を付けているので安全と分かっているけど、不安定な籠の上に立つのはとてもハラハラし、グラグラ揺れるつり橋を渡っているような感じがしました。一つ一つ積み上げた上に登って行くことは、壁を登っている時のように着実に先へ進めていることを感じました。挑戦者が一番高くまで登った時には、みんなで拍手を送りあいました。



オールダムの大自然の中で、色々なやり方で「登る」という経験を通して、みんなで助け合いながら一人一人が全力で先へ進むことができました。この時の解放感やワクワクする気持ちは、僅かに残っていた緊張も解きほぐし、その先の研修をさらに良いものにしてくれたと思います。(坂本 奈々美)

3) 異文化交流パーティー

8月3日、キャッスルショウ現地の方との交流パーティーを行いました。パーティーには、視覚障害者の方や高校生、子供を含む約40人が参加して下さいました。

パーティーでは、日本文化紹介を行いました。事前の勉強会の時に役割分担をし、文化紹介の準備をしておきました。はじめの40分で1人1つずつ文化紹介をし、4人で合計4つの日本文化を紹介しました。4つのグループを作り、10分毎に次の紹介コーナーへと机を移動してもらいながら、各文化について体験を交えて紹介しました。

そのあとは、フロアバレーボールを紹介しました。これは、日本の視覚障害者スポーツの一つです。以下では、それぞれの研修生が担当した文化紹介について報告します。(近藤 悠斗)

(1) 近藤 悠斗

私は、そろばんを紹介しました。私は数学が好きで、そろばんは、和算(特に江戸時代ごろに繁栄した日本独自の数学。西洋の数学に対抗できるほど発達した)の重要な特徴となったことから、紹介したいと思いました。そろばんを通して、和算についても知って頂きたいと考えていました。しっかり触りながら体験して頂けるように、そろばんを4つ持っていきました。

まず、そろばんの構造を説明し、枠や珠の配置を確認してもらいました。各位の中で、



5を表す珠と1を表す珠について説明し、そろばんを使ってどのように数を表すのかクイズを出しながら紹介しました。それから、足し算に挑戦して頂きました。足し算の仕組みが分かった時には、とても喜んで下さり、うれしかったです。

今回の文化紹介で、そろばんを実際に使いながら、日本の計算手段に興味を持って頂けたことは、本当によかったと感じています。しかし、私は紹介したい内容をたくさん用意していたので、全部を話すことはできず、途中でそろばんの体験に時間をかけられるように他の内容を省くことにしました。計算の方法などは、かなり複雑で、人によって疑問に思うことも違うので、伝えるのは難しかったです。一生懸命私の話を聞いて楽しそうに取り組んで下さったので、私にとっても楽しい時間になりました。原稿に頼るのではなく、相手とのコミュニケーションを大切にして、自分の言葉で伝えることが重要だと感じました。言葉がうまく伝わらないこともあり、もっと話せるようになりたいと強く思いました。これから、より分かりやすく、もっといろいろなことを英語で人に伝えられるように、頑張りたいと思います。

(2) 坂本 奈々美

私は、日本の文化紹介でカルタの百人一首を紹介しました。和歌の英訳は、分かりやすく訳されたウェブサイトを利用し、日本語と英語を墨字と点字で書いた物と、百人一首を用意しました。

初め私は、百人一首の構成や和歌の作者についてしっかり理解してもらえるように、時間いっぱい説明しようとしていました。しか

し、時間制限もあり、途中から相手に和歌を朗読してもらうことにしました。すると、全部話そうとしていた時より積極的に質問もしてもらえ、温かい雰囲気で紹介することができたと思います。

紹介中、歌合せという和歌のコンテストのようなものの中で、とても優れていると評価された二種の和歌について話し、どちらが好きか聞いてみました。すると、多くの方が自分の好きな方をはっきり答えてくれました。日本では、口々に返答が返ってくることは少ないように感じます。こんな小さなところからも、日本とイギリスの違いを感じられました。

この紹介を通して、多くを正確に理解してもらうことを目指すより、相手に参加してもらったり、質問をして反応を確かめてみたりなど、相互にやり取りをすることでより相手に伝えられることがあると分かりました。カルタの絵が可愛いことや、面白かったと言ってもらえたことは、このパーティーで文化紹介をできた喜びをさらに大きくしてくれました。

(3) 野呂 美遥

私は日本の伝統的な文化の 1 つである折り紙を紹介しました。広島で平和を願って折られた千羽鶴の話や、折り紙と千代紙の違い、1 枚の紙から様々な作品を作ることができることなどの紹介をした後に、チューリップを折ってもらうという企画をしました。一人ひとりに折り紙を配り、私も実際に言葉で説明をしながら折ってみました。三角に折ることや、角と角を合わせるなどといった複雑な表現もあり、日本の文化を相手に説明することがいかに難しいかも分かりました。来て下さった皆さんは、折り紙は素晴らしい、日本の芸術は素敵だと感想を言ってくれ、またある人は折り紙で船を折って私にプ



プレゼントしてくれたので、私はとても嬉しい気持ちになりました。

そしてもう一つ嬉しかったことがあります。それは私のつたない英語を一生懸命聞いてくれたことです。私の説明を聞きながら、折り紙を一生懸命に折っていたこと、興味を持って参加して下さったことが私にとって何よりの大きな喜びでした。

これからも英語を更に勉強して、自分の言いたいことをしっかり伝えられるようになりたいと思っています。

(4) 廣田 成美

私は「漢字」をテーマに、来て下さったみなさんに書道を体験してもらいました。私の中で漢字はとても特徴的な文字で、奥が深いというイメージがあります。難しいという人が多い漢字ですが、それを実際に書いて頂くことで、少しでもその魅力を感じてもらえればと思い、このテーマにしました。

日本人として生まれた多くの赤ちゃんが、生まれた時に漢字などを組み合わせた名前を授かります。そしてお母さんとお父さんは、「こんな子に育てて欲しい」「こんな未来を送って欲しい」などの思いを込めて名前を授けます。そしてその役割を果たすのが、漢字が持つ文字の意味です。私はこのことが日本特有のとても素敵な風習だと思います。このことを伝えたいと思い、まず自分の名前が持つ意味を説明してみることにしました。伝わるかが不安なところもありましたが、発表を聞いて下さった皆さんは「いいね！」と反応して下さいました。この風習を伝えられたことが嬉しかったです。そして最後に「花」という漢字の説明をし、来て下さった皆さん全員に筆で書いて頂きました。皆さんが楽しそうに筆を動かす、大胆で素敵な花を描いて下さり、嬉しかったです。



私は一人で何かを英語で紹介をすることが初めてだったので、伝わるかという不安が大きかったです。自分の作った原稿で発表し、それが理解してもらえ、さらに楽しんでもらえたことが自分にとって大きな自信になりました。

私は一人で何かを英語で紹介をすることが初めてだったので、伝わるかという不安が大きかったです。自分の作った原稿で発表し、それが理解してもらえ、さらに楽しんでもらえたことが自分にとって大きな自信になりました。

(5) フロアバレーボール

最後に全員で紹介した「フロアバレーボール」とは、視覚障害者用のバレーボールのようなスポーツで、ボールはネットの上ではなく下を通すところが大きな特徴です。

フロアバレーは現在日本でしか行われていません。私たちには、このスポーツを国内だけでなく、将来は海外にも広めたいという夢があります。そのための第一歩として、イギ

リスの人たちにフロアバレーを紹介するコーナーを企画しました。

限られた会場の広さや 20 分間という短い時間も考慮し、ネットの代わりにロープを張る等の工夫もしました。まず概要とルールを簡単に説明し、聞いている人がイメージできるように試合のビデオを見てもらいました。さらに、一番魅力を伝えられる方法は実際にやってもらうことだと思い、数人にフロアバレーを体験してもらう機会も設けました。



発表を終えて、正直聞いて下さった皆さんがどう感じたのかわかりませんでした。しかし、お互いを助け合いながらチームワークを作り、細かな作戦も立てられるところがこのスポーツを最大の魅力だと伝えたことが、少しでも現地の方の心に残ってくれたなら紹介できて本当に良かったと思います。



今回の企画は、何かを紹介し、魅力を分かってもらうためにどんな工夫をすればいいのかなどを考える良いきっかけになりました。これから人に興味を持ってもらえる発表ができる人間になりたいです。そして、フロアバレーを世界中の視覚障害者を含めた沢山のの人に愛されるスポーツにしたいです。(坂本 奈々美、廣田 成美)

(6) まとめ

日本文化を紹介した後は、全員でケイ先生が中心となって用意して下さった食事と、私たちが準備したいなり寿司と煮卵の日本食を皆で食べながら、会話を楽しみました。

このパーティーでの交流は、とても充実したものになりました。うまく伝えられるか心配で緊張もしていましたが、始まってみると、だんだん緊張もほぐれて、参加者の方々と一緒にパーティーを楽しむことができました。日本文化に関心を持って、一生懸命私たちの話を聞いて下さったことがとても嬉しかったです。日本の文化を紹介したり、他の文化について知ったりすることは、とても大切だと感じ、今後も機会を見つけて、日本について紹介したり、他の国のことを学んだりしていきたいと思いました。(近藤 悠斗)



4) タッチ・ツアー

今回私たちが研修で伺った大英博物館、炭鉱博物館、セントポール大聖堂、剥製の観察などはすべて「触る」ことを通して学ぶことができました。

見えない、見えにくい私たちは聴覚から得る情報や匂い、そして手で触って感じるという様々な感覚を使っています。そんな視覚障害者のためにバリアフリーとして最近多くの博物館や施設で行われているのが「タッチ・ツアー」というものです。

一般のお客さんにはガイドの方はつかず、自分たちで見学していきますが、私たちはガイドの方について頂き、展示物の説明を受けながら見学を進めることができました。

この体験を通じて私たちは、展示物についての理解を深めるだけでなく、イギリスではバリアフリーや情報保障が進んでいるということも、身をもって感じることができました。(廣田 成美)

(1) 炭鉱博物館

2日目のケイ先生による講義を終えたあと、私たちはバスで1時間ほどの場所にある炭鉱博物館へ向かいました。私たちは二つのグループに分かれ、ガイドの方の案内を受けながら見学しました。



炭鉱博物館はヨークシャーに位置し、イギリスの産業革命時代に盛んにおこなわれていた石炭採掘の様子を知ることができる場所です。ツアーでは実際にイギリスの産業革命時代のことやその時の労働環境などに

ついて説明を受けることができました。実際に見学した場所は地下 140 メートルで気温が低く、とても狭く暗い道が続いていました。どのようにして採掘が行われ、時代が進むにつれ採掘の仕方が変わっていったかを理解することができました。

私たちがこのツアーで印象に残っていることは大きく二つあります。一つは、過酷な労働環境です。世界史で習った産業革命はイギリスが世界をリードし、どんどん発展していく華々しいイメージがありました。しかし、その背景には子どもまでもが働くという厳しい労働環境があったことを知らされました。



もう一つはガイドの方によるユニークなツアーです。担当して下さったガイドの方はとても声が大きく、冗談も上手なとても面白い方でした。このツアーには様々な工夫が施されており、穴を掘るときに使われたダイナマイトの音を聞かせて下さったり、採掘していたときによく出ていたという「ネズミ」の人形を放り投げて、ドッキリを仕掛けて下さったりもしました。そんなユニークなツアーのおかげで皆の緊張もほぐれました。(廣田 成美)

(2) 剥製観察



キャッスルショウセンターには、周辺地域に生息する野生動物の剥製が多数あります。イアン先生に解説して頂きながら、剥製に触り、動物の体の特徴や様子を観察しました。

剥製には、モグラ、ウサギ、フクロウ、カナダグース、リスなどがありました。それぞれに体の特徴が違うことが、触っていてとてもよくわかりました。同じ鳥類でも、くちばしの形状や羽の触

り心地は大きく異なりました。例えば、フクロウは比較的小さめの羽をもっていたのに対し、カナダグースはもこもこしたとても厚みのある翼をもっていました。カナダグースの

羽の感触は、とても印象に残っています。また、フクロウは、夜間でも高い視力を発揮できるように、大きな目を持っていたのが特徴的でした。その他にも、リスやモグラが体は小さいにもかかわらず、鋭くて大きな爪を持っているのが印象的でした。

実際に触ってみることで、細部まで動物の体の構造を知ることができたと思います。特に、羽毛の感触や爪の鋭さ等は、触って初めてよく分かるものだと感じました。(近藤 悠斗)

(3) 大英博物館

8月5日にロンドンにある大英博物館のタッチ・ツアーに参加させて頂きました。今回見たのは主にピラミッドから出土した古代エジプトの彫刻や石像、ロゼッタストーンなどに代表される石碑などです。

彫刻や石像は教科書などを読んでイメージしていましたが、実際に触ってみるととてもゴツゴツとしていて、想像していた質感と異なっていました。

今回私が一番印象に残った彫刻は、船の上に女性が座っている作品です。船の端から端まで確かめてみると、歩いて回らなければ触りきれないほどとても大きく、触っていると何



か力強さを感じました。女性の顔や体は立体的で、また、女性のスカートの形や足の太さなど細かいところまでもしっかりと表現されており、大変心に残る作品でした。



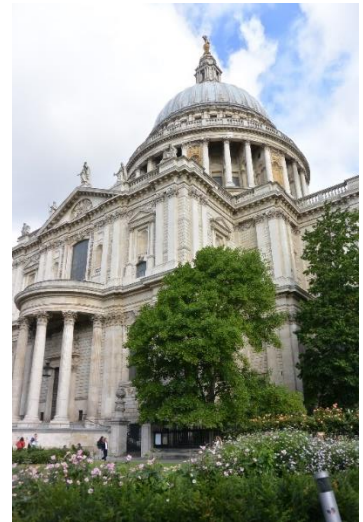
作品を手で触って確かめる機会はあまりないので、とても貴重な経験でした。また、イギリスや他国の歴史の重みを感じることもできました。

ガイドの方も一つ一つの作品についてとても詳しく解説して下さったので、触りながらイメージを膨らませることもできました。このようなタッチ・ツアーはまだ日本には広まっていないので、これから全ての人が博物館を楽しめるような工夫がされていくと良いと思いました。(野呂 美遥)

(4) セントポール大聖堂

8月7日、私たちは、世界的に有名な教会であるセントポール大聖堂を訪れました。

セントポール大聖堂は、クリストファー・レンによるバロック建築の傑作で、現在の建物は 1710 年ごろに再建されたのだと聞きました。聖堂内に入るとすぐに、中が非常に広く、天井がとても高いことに気がつきました。そしてそこには、多くの像や装飾を施した柱などが点在していました。



教会の床に、一部材質が他と異なる部分がありました。円形で、所々穴が空いているので、女王様がハイヒールをひっかけてしまったことがあってからは、王室の方が通る際は板を敷いて穴を塞いでいるというエピソードを聞きました。

教会には、聖歌隊が歌うためのスペースがありました。そのスペースの壁には、聖歌隊が使う楽器を表現した彫刻があり、今触っている物は何の楽器を表しているのだろうと考えることもとても面白かったです。また、聖歌隊のリーダーが



持ち上げる十字架にも触らせて頂きました。それはずっと持ち上げているにはかなり重く、これを持ち上げてきた子供たちは、重さに責任も背負いながら精一杯こなしてきたのだと思い、尊敬の念を抱きました。

教会の中心部にある、最も大切な所も見学しました。そこには、手の届く範囲に花の彫刻、さらに上には渦巻のように金色の装飾が巻き付いた柱が何本も立っていま

した。花の装飾は、少しずつデザインが異なり、細部まで観察すると、さらに面白さが増すような、繊細で煌びやかな物でした。この時、司祭が短いお祈りを捧げているところを皆で聞きました。世界的に有名な教会で実際のお祈りを聞いたことも大切な思い出の一つです。

今回のタッチ・ツアーでは、囁きの回廊等には行けませんでした。その分貴重な像や柱を一つ一つじっくり触ることができました。

それらの装飾は全て、花の模様の縁や、聖書のページの刻みまで、本当に丁寧に作られており、洗練された芸術のすばらしさに感動するばかりでした。手で触れられることは私たちに多くの情報を与えてくれますし、見るだけでは分からない質感や素材の冷たさ・温かさも感じられます。そのため、このようなタッチ・ツアーに参加させて頂き、本当に良い経験ができました。(坂本 奈々美)



5) イギリスのインクルーシブ教育

インクルーシブ教育とは、障害のある児童・生徒が通常学校で他の児童・生徒と同じように学習するという教育システムです。そこでは、個々のニーズを大切にしながら、包括的な教育の枠組みを目指します。近年では、世界中でインクルーシブ教育が導入されています。日本では、依然として特別支援教育が中心となっていますが、インクルーシブ教育は徐々に盛んになってきています。ここでは、イギリスのインクルーシブ教育について学んだことをご報告します。

(1) イギリスのインクルーシブ教育の歴史と現状

ケイ先生からイギリスのインクルーシブ教育についてお話をお聞きしました。イギリスでは1960年代から徐々に、視覚障害児や保護者が通常校での学習を望むようになります。1978年にウォーノック報告が提出されたことを受け、政府がインクルーシブ教育推進の方針を示し、視覚障害児も通常学校で学習するようになっていきました。現在では、多くの視覚障害児が地域の通常学校で学習しています。



視覚障害児のインクルーシブ教育では、通常学校で学ぶ児童・生徒を支援するシステムが設けられています。まず、その一つが視覚障害教育専門教員(QTVI)です。視覚障害教育に関する専門の資格として設けられ、そのためのコースも設置されました。また、チームによる支援体制もつくられています。QTVIとティーチングアシスタントでチームを組織し、視覚障害児を誕生時から支援する取り組みも行われています。通常学校で、視覚障害児が学習するとき、教員の理解を促したり、クラス内で孤立せず、友人を作れるように支援したりもしています。

インクルーシブ教育の課題についても、話して下さいました。課題は、主に二つあるようです。

一つは、視覚障害児の自立についてです。イギリスでは、統一的なカリキュラムが設定されているため、自立活動などの特別な授業を設けることが困難です。加えて、通常学校では、周囲の生徒に合わせようとして白杖などを使わない結果、なかなか自分でできることが増えないこともあります。また、イギリスでは、視覚障害者の失業率が高くなっていますが、それは見えないからではなく、教育の中で、十分にコミュニケーション力が向上していないことが原因ではないかとおっしゃっていたことが印象に残っています。

もう一つの課題は、友人をつくることです。大きな学校に視覚障害児が一人というケー

スもあることから、自分が一人だけの特別な存在ではないことを実感してもらえるように、視覚障害児を集めて、キャンプやヨットに乗るなどのイベントが行われています。

イギリスのインクルーシブ教育について学ぶ中で、様々な教育システムのメリットやデメリットをよく考えながら、教育制度を工夫していくことが大切だと感じました。日本では、今後インクルーシブ教育と特別支援教育の両方の良さを取り入れる方法を探していくことが必要ではないかと思います。

(2) ケンブリッジ大学における障害学生支援

ケンブリッジ大学は、多くの著名な科学者や政治家を輩出しただけでなく、障害のある多くの学生が学ぶ場でもあります。ケンブリッジ大学の Disability Resource Centre を訪問し、ケンブリッジ大学での障害学生支援についてお聞きすることができました。

ケンブリッジ大学に在学する学生の15%が障害など、なんらかの特別なニーズがあり、その人数は年々増加傾向にあります。障害学生のうち、約2%が視覚障害学生です。そのほかに、発達障害、精神障害、肢体不自由、聴覚障害など様々な学生が在学しています。

ケンブリッジ大学の障害学生支援は Student Support Document (SSD) と呼ばれる書類に基づいて行われます。この書類は、大学入学直後に行われる専門の資格を持つスタッフ



によるアセスメント（障害状況の診断）と学生自身の申告、学生が必要とするサポート事項から成り、大学全体で共有されます。SSD に基づくサポートの下で、視覚障害学生が化学や生物学など、特に視覚障害者にとって困難な科目も履修することができます。

専門のアドバイザーがいることもケンブリッジ大学の特徴です。アドバイザーは、教員免許、障害を診断する資格、学習障害に関する大学院での学位を条件に選定され、高い専門性を持っています。



る資格、学習障害に関する大学院での学位を条件に選定され、高い専門性を持っています。

障害学生に対してアドバイザーの人数がとて少ないため、人数だけで割ると、アドバイザー1人で約650人の障害学生を担当していることとなります。

充実した人的支援も大きな特徴です。ノートの手帳や実験の補助、カウンセリングなど、幅広い分野で人的支援が提供されています。毎年、10,000時間の人的支援を行っているとのこと。

こうした支援は、障害平等法に基づいています。ここでは、公的教育機関に対して、障害のある学生や職員へのサポートをその義務として規定しています。障害平等法に基づいて、バリアフリーに配慮した環境の整備なども行われます。

サポートの資金は、イギリス人学生については、イギリス政府や外部組織による支援金を利用し、障害学生がサポートの費用を負担しないようになっています。また、ケンブリッジ大学では、留学生についても資金を用意して、できる限りイギリス人学生と同じようなサポートを実現しようとしています。難しい点もあると聞きました。

障害学生支援の課題についてもお聞きしました。最大の課題は、増加し続ける障害学生に対して、支援の規模が追いついていないことです。イギリスではどの大学でも障害のある学生の数は増加しており、ケンブリッジ大学においてもその傾向は同様です。

私は、今回の訪問を通して、学生のニーズに基づいた大学全体での支援は、ケンブリッジ大学の障害学生支援の本当に素晴らしい点だと感じました。一方で、日本の大学には、障害学生支援に一般学生が関わるシステムをもつところがあります。ケンブリッジ大学では学生によるサポートはほとんど行われていなかったため、日本の障害学生支援の良さの一つだと感じました。日本とイギリスの大学の様子を比較しながら、日本の良さや課題について新たな視点から考えることができたと思います。国の枠を超えて、世界規模で教育システムの良さを共有し、それぞれの国の障害教育を改善していくこともできるのではないかと感じました。(近藤 悠斗)

6) RNIB 訪問

RNIB (英国盲人協会) は、ロンドン市街にあり、多くの視覚障害者に情報提供や支援を行なっています。

私たちは8月6日にRNIBに伺い、視覚補助具の見学をしたり、講義を受けたりしました。テーマを3つに分けてご報告します。



(1) 公共政策と雇用

私たちは、RNIB で公共政策部長にお話を聞くことができました。

RNIB は、視覚障害者にとってより良い生活環境を作るために政治家への働きかけをおこなっています。実際に、600 人以上の議員さんとの関係構築に取り組んでいます。この関係構築は視覚障害に対する関心を高め、重要な決議案が通るためにも大切なことだとおっしゃっていました。



RNIB では、弱視や全盲の視覚障害当事者を含めて、多くの専門家が働いています。このような専門家が一緒になって議員の方と議論することで視覚障害者にとってより良い法律を作ることができています。また、議員の方に視覚障害者の暮らしや生活、盲導犬に関する知識を深めてもらうことを目的にイベントも開催しています。

イギリスには、眼科において、患者のメンタルケアや、福祉サービスとの連携サポートなどをおこなうアイクリニックリエゾンオフィサー（ECL0）という視覚障害者支援のための職種が存在します。この職業には、視覚に障害のある人も就いており、新たに視覚を失った人にとってロールモデルにもなるとても大切な職業です。しかし、新しい職種であるので、まだ全ての眼科に ECL0 がいるわけではありません。

RNIB は議員の方に、どこの地域に ECL0 がいるのか、どこの地域で足りていないのかを伝えたり、ECL0 が視覚障害者に対してどんなサービスを提供しているのかを、実際に知ってもらえるように呼びかけたりする活動をしています。

イギリスでは 4 人に 1 人の視覚障害者しか仕事に就けていないという現状があります。技術や才能があるにも関わらず仕事に就けていない人もいます。その大きな原因が働きやすい環境作りへのマインドがないということです。そのため、RNIB は雇用主に直接交渉や呼びかけをおこなう活動をしています。

このように RNIB は実体験や統計をもとに、たくさんの人と関わりを持ち、視覚障害者の暮らしをより良くする活動を行なっています。



(2) 支援技術



私たちは RNIB でテクノロジーサービスを提供するお仕事をされている方にお話を聞きました。この方のお仕事は、視覚障害者が技術を活用するためのサポートをすることです。大きく分けて三つあります。

一つ目は支援を必要とする人に対する電話での直接的なサポートです。一ヶ月あたり約 12,000 人のサポートを

しています。サポート内容はローテクやハイテクなど幅広く、iPhone や iPad などのスマートデバイスに関する問い合わせを多く受けます。説明には、オンラインやビデオを用いることもあります。

二つ目に、電話でのサポートでは不十分な場合には、ボランティアを派遣しています。RNIB には約 800 名の技術サポートボランティアが在籍しています。ボランティアは各地に分散しているので、どの地域でもサポートを受けることができます。

三つ目は、各地域の支援組織との連携です。地元（慈善団体）との取り組みです。それぞれの地域にある支援団体と全国的なネットワークを構築しています。地域によって支援者数の規模は様々ですが、「視覚障害者にとって支援技術を活用することは大切」という共通認識を持ちながら活動をしています。RNIB が各地域の支援団体を集めて支援技術について説明やアドバイスをすることで、その大切さを知ってもらい、知識を増やしてもらうことができます。

これらの他、ある人の遺産を利用して、貧困に悩む視覚障害者に対し、一人当たり 500 ポンドの援助をし、生活支援機器を購入できるよう支援するプログラムもあります。

このようにボランティアや慈善団体とも連携をすることでより広い範囲で視覚障害者の暮らしを支えています。

(3) 支援機器

私たちは RNIB のイノベーションチームの方にお話を聞きました。イノベーションチームは社会の人々の視覚障害に対する認識を高めるための活動をしています。

具体的には VR の技術を用いて視覚障害者の見え方を体験できるアプリを開発し、普及させています。また、肉声に近い音声読み上げを実現する研究をおこない、アマゾンから発売されているアレクサの音声開発をおこなってきたそうです。さらに街中に QR コードを貼って、視覚障害者が目的地を見つけやすくするアプリと連動させる取り組みにも関わっているそうです。

RNIB の入り口に入ってすぐ右手には、さまざまな視覚補助具の展示スペースがあり、誰でも触れて体験することができます。私たち、白杖や調理道具、時計、最新式のスマートフォン用の点字ディスプレイなどに触れることができました。

(4) まとめ

RNIB では、政治面、福祉面、IT・技術面、様々な分野から視覚障害者の支援を行っていることが分かりました。視覚障害者の実体験をもとに、政治家や大企業と交渉していくことが、社会を変えていくために大切だといえます。これからも進化していくテクノロジーは多くの視覚障害者を助けるものだと思います。そのために RNIB は重要な役割を担っていると感じます。

(廣田 成美)



7) 在英国日本大使館訪問

私たち研修生は8月7日、日本大使館を訪問しました。日本大使館に入って、イギリスと日本の雰囲気融合した独特な雰囲気を感じました。イギリスにきてから1週間経っていたので、訪問先で日本語が使われているのがとても新鮮でした。

大使館の方からは、イギリスの保険や医療制度、日本大使館の活動等についてお話を伺うことができました。また、弱視のパラリンピック金メダリストであるノエル・サッチャーさんからも話をさせていただきました(ノエルさんのお話についてのまとめは別に記します)。

イギリスには、国民保険制度(NHS)があり、病院を無料で受診することができます。しかし、日本とは、受診の方法が大きく異なることが衝撃的でした。イギリスでは、General Practitioner と呼ばれる、かかりつけ医をまず受診します。必要があれば、そこでより専門的な病院を紹介してもらい、予約します。しかし、専門病院などは、数か月待ちのこともあり、待っている間に、症状が悪化するなどの問題点が指摘されているそうです。「ゆりかごから墓場まで」という言葉に象徴されるように確かに医療や福祉が整っていることがわかりましたが、課題も知ることができました。病気によっては長期に渡り順番を待っている間に生存率が大幅に下がることもあるので、これからこのような問題をどう解決しようとするのか着目していきたいです。また、いくら福祉や制度が進んでいても各国ごとの課題があるので、そのような解決すべきことをお互いにさらけ出しあって、どうすれば解決につながり、良いところを取り込みあえるのか、もっと話し合える場が増えるといい

のではないかと思いました。そしてイギリスも高齢化問題が深刻化しているという話を伺い、少子高齢化は今世界で大きな問題になっていることを改めて実感しました。

日本大使館の活動の中には、JET プログラムという、日本の学校で英会話を指導する教員派遣コーディネーターがあることがわかりました。ALT の先生達の中には、日本で英語を教えることをきっかけに、日本で知り合った人と個人的な人間関係が広がる人も多くいるということを知ることができました。日本大使館のイギリス人職員の中には、JET プログラムで日本に滞在した人もいるそうで、両国の懸け橋になっているのだなと思いました。

研修生からの質問の中には、視覚障害教育を発展させるためには国際的な協力が必要だと思うが、どのようにすれば、こうした協力関係を築いていけるかについての質問が出ました。大使館の方からは、国のレベルで話し合いながら進めていくこともあるが、まずは今の自分の気づきや意見を身近なところから発信していったらどうかというアドバイスをいただきました。

今回、私たちのために時間を作ってくださったことを深く感謝いたします。(野呂 美遥)



8) 視覚障害者リーダーを訪ねて

私たちはこの研修で、社会で活躍されている視覚障害者の方々からお話を聞きました。その方々の取り組まれてきたことや、勇気をもらえた言葉などについて紹介します。

(1) Alba さん

Alba さんは、旦那さん、2 歳になるお子さん、盲導犬と一緒に、私たちが宿泊していたキャッスルショウまで来て下さり、そこでお話を伺いました。

スペイン人の Alba さんは、学生の頃の家族旅行がきっかけで、大学卒業後にインドで 2 年間過ごし、視覚障害者の自立支援プログラムに関わったそうです。そこは、道路状況も悪く歩くのは大変だったそうです。そのような中、2 年間で過ごすうちに、やろうと思ったことは何でもできることに気づいていったとおっしゃっていたところがとても印象的でした。

その後は母国のスペインからイギリスに移り住み、スペイン語やインドの少数民族言語の通訳として盲導犬と共に、病院や刑務所に行き、仕事をしました。その後、Eye Clinic Liaison Officer（以下 ECLLO）として現在も勤めています。ECLLO は、眼科で視覚障害の診断を受けた患者に対し、情報提供をしたり、心のケアをしたりする職業です。Alba さんはその他、生活資金の相談に乗ったり、



視覚障害者支援団体の紹介等も行っているそうです。これは日本にはない職業なのでとても興味深い内容でした。

また、イギリスには、日本の法定雇用率のような制度はないものの、Access to Work という制度が設けられており、障害者が働く時に必要な支援に掛かる料金を国が負担してくれるそうです。Alba さんはこれを利用して、書類の読み書きの補助を受けているとお聞きしました。

インド滞在、通訳、ECLLO 等、とても行動的で明るい Alba さんからお話を聞くことができ、改めてまだまだ知らない世界がたくさんあることを感じました。



(2) Noel Thatcher さん

Noel さんには、ロンドンの日本大使館でお話を伺いました。日本語検定 1 級保持者でもある Noel さんは、全て日本語で私たちの質問にも答えて下さいました。

Noel さんは、パラリンピックに 6 回出場し、5 個の金メダルを獲得されたアスリートです。たまたま学校で、罰として校庭を何周も走らされたことから陸上競技に目覚め、その後多くの選手権にも出場されました。マラソン大会に参加するために、初めて宮崎県を訪れた時、コミュニケーションが取れなかったことから日本語を学びたいと考えたそうです。現在は、理学療法士として働く傍ら、地域の学校で、障害者スポーツのことなどについて

講演活動も行っています。



私たちは理系教育の発展に関する内容からパラリンピックスポーツの普及に至るまでたくさんの質問をしました。その中でも私は、フロアバレーをどう広めて行けるかなどについてお聞きしました。私は日本でしか知られていないこのスポーツを、世界に広めていきたいと考えているからです。

この質問に対し、色々な人に声をかけて諦めずに取り組み続けることが重要だと言って下さいました。また、文化は一気に広がるものではないけれど、人から人へだんだん伝わって行くものなので、地道に続けて行くことが大切だと分かりました。

話の中でも、質問に答えて下さる時にも、何度も言葉に込められていた「やろうと思えば絶対できる！」というメッセージがとても印象的でした。Noelさんの言葉には大きなパワーがあり、これから繋がりを大切にしてどんどん輪を広げて一つひとつ成し遂げて行けると思えるような勇気をくれました。「障害者は健常者とは違った力がある。」この言葉は、これから私たちが将来に向かって進んでいく中で大きな支えになるでしょう。(坂本 奈々美)

9) 各国の料理

多民族国家であるイギリスでは、伝統的な料理だけでなく様々な国の料理を楽しむことができます。10日間の研修の中で食べたイギリス料理と各国の料理について報告したいと思います。

まずイギリス料理についてです。イギリス料理の体験として、スコーン作りやアフタヌーンティー体験をし、また、有名なフィッシュアンドチップスも食べました。スコーン作りでは、小麦粉とバターを混ぜるところから始めました。レーズン入りのスコーン





や、プレーンのスコーンを作りました。焼いている際にとっても香ばしい香りが部屋中に漂っていました。イギリスでは、スコーンをナイフで横半分に切り、その上にジャムやクロテットクリームを乗せて食べます。焼きたての香ばしいスコーンにトッピングが加わると、更に甘く、とてもおいしかったです。

アフタヌーンティー体験でもお店で焼かれたスコーンを食べましたが、自分たちで作ったスコーンとはまた違った味を楽しむことができました。また、本場の紅茶を飲むこともできました。同じ紅茶でも様々な種類があることがわかりました。

次に各国の料理についてです。ロンドンではモロッコ料理とスペイン料理を食べることができました。特に、モロッコ料理が印象に残っています。「タジン」というツボのような形をしている鍋を使った肉や魚の煮込み料理を食べました。クスクスという世界で一番短いパスタや野菜を添えて楽しみました。クスクスはスープの味とマッチして、とてもおいしかったです。モロッコ料理のお店は少し薄暗く、間接照明がとてもきれいでした。六角形になっているモロッコの伝統的なランプが店内を照らし、まるでモロッコに旅をしているような気分になりました。



他にもこの10日間では、日本ではあまり食べることができないような大きなハンバーガーやサンドイッチなども体験することができました。世界には、様々な食文化があるということを身をもって感じました。(野呂 美遥)

7 研修のまとめ (研修生)

1) 近藤 悠斗

私にとってこの研修はとても充実したものになり、一生の財産となったと感じています。仲間や先生方と過ごし、様々な方と出会い、多くの活動に挑戦することができたこの研修は、本当に貴重な時間でした。私は、三つの目標を立てていましたが、どれも達成することができたと思います。

研修で、特に印象に残ったことが三つあります。



一つ目は、「今からでも何でもできる」と思えた事です。私は、視覚障害理系教育の発展に貢献したいと考えてきましたが、今の自分にはできないのではないかと感じていました。しかし、イギリスで活躍されている視覚障害者の方と出会う中で、「失敗はしても挑戦することはできる」と思うようになりました。

二つ目は、イギリスと日本の良さに気づけたことです。イギリスと日本の教育制度等は大きく異なっていましたが、それぞれの良さを知ることができたと思います。例えば、個々の障害児のニーズに適切に対応しようとするインクルーシブ教育の体制や、RNIBによる視覚障害当事者の意見発信などは、日本にはないイギリスの良さだと感じました。

逆に、視覚障害教育の専門性や大学での学生サポーターによる障害学生支援などは、日本の良さだと思います。

三つ目は、英語がもっと話せるようになりたいと思ったことです。ホームステイや異文化交流パーティーなどで話した時間は、私にとってとても楽しいものでした。しかし、同時に相手の言いたいことがなかなか分からなかったり、自分の言いたいことが伝わらなかったりして、もどかしさを感じ、もっと英語が話せるようになりたいと強く思いました。今後、研修で感じた気持ちを大切にしながら、努力したいと思います。

この研修から、私は、自分が今後取り組みたいことを具体的に見つけられたように思います。それは、世界中の視覚障害者がより強い繋がりをもって、協力できるようにすることです。各国それぞれの取り組みの良さは、他の国の視覚障害者の学習や生活の改善に役立つと思います。また、理科の実験方法などを世界規模で工夫を考案し、改良することができれば、視覚障害教育の発展につながると思います。課題を共有したり、大学進学などの困難な問題と一緒に取り組むことができれば、もっと多くの分野で視覚障害者が活躍できるようになると考えます。

今から少しずつ自分にできることをしていきたいと思います。例えば、日本で、視覚障害者のために開発された理科の実験方法を英語の文章にまとめて発信すれば、海外の人に役に立てても



らえると思います。私が知ったイギリスの取り組みを日本で紹介することもできると思います。

研修は終わりましたが、今新たなスタート地点に立っているように感じています。今回頂いた貴重な機会を活かしていけるように頑張りたいと思います。

最後に、スタッフの方々、ダスキンのの方々をはじめ、研修をサポートして下さったすべての方に心から感謝しています。そして、共に充実した時間を過ごすことができた仲間とイギリスで出会った方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

この研修が今後も続いていくことを願っています。

2) 坂本 奈々美



この研修は、全てが出会いと発見の連続でした。たくさんの方とお会いし、貴重な場所へ訪問でき、スタッフの方々からも色々な話を聞いたり、周りの様子を詳しく教えていただいたりして、学ぶことや吸収できることで溢れていました。イギリスで過ごした十日間は、私の人生において大きな財産になりました。

私は、「イギリスのインクルーシブ教育について知る」、「イギリスの視覚障害者とたくさん話し、異文化交流をする」という二つの目的を挙げていました。研修でこれらの目的は達成できました。

今まで、共生社会を実現するには、障害者も健常者と同じ環境で過ごすことが必要で、そのために日本もインクルーシブ教育を採り入れていくべきだと考えていました。しかし、この方法が必ずしも全てを解決する訳ではなく、専門性の維持などに関して、まだまだ課題があると分かりました。そして、日本の盲学校が高い専門性を持っていることは大きな良さであると再認識できました。一つの方法が大きな解決策に繋がるかもしれないと正解を求めていた私は、まだまだ問題を一面的にしか見られていなかったと思いました。

また、現地の人と会話する中で、前にも増して自分の言葉が相手に伝わる大きな喜びを得られました。移動中のバス内で同年代の人とお互いの学校や趣味についてずっと話せたことや、訪問先で一部ではありますが、通訳を介さずに質問をできたことはとても嬉しかったです。私の英語力は未熟なので、相手に伝えたい、言っていることを読み取りたいという思いを持ち、もっと英語を学び、たくさんの人と深く語り合えるようになりたいと思いました。そして、異文化交流の一つとして、フロアバレーを紹介できたことは、これからこのスポーツを世界に広めて行きたいという目標の第1歩になったと強く感じました。

これからスポーツを通して言語や文化の壁を越えられる交流の場も作っていきたいです。

私に勇気を与えてくれたのは、Noel Thatcher さんの、「やろうと思えば絶対できる」という力強い言葉でした。私たち障害者は、健常者と全く同じようには行動できず、不利になってしまうこともたくさんあります。しかし、決して弱者という訳ではないのだと思いました。



障害があるからこそできることや見えてくるものはもっとたくさんあります。やり方を工夫すればできることは広がり、諦めずに自分の信念を持って動き続けることが一番大切だと教わったので、私もこれを行動で示せる人になりたいです。そして、発展途上国で視覚障害児教育を充実させるという私の夢を実現できるように、これからも努力していきます。

このような素晴らしい研修がこれからも継続されることを心から願っています。そして最後に、この研修に同行して下さったスタッフの皆様、イギリスや日本で支えて下さり、私たちに多くの学ぶ機会を与えて下さっている全ての皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

私はこの先、障害者リーダーとして社会に貢献できる人になることを約束いたします。

3) 野呂 美遥



私はジュニアリーダー育成グループ研修を通して学んだことが三点あります。

一点目は、イギリスと日本の福祉制度の違いです。RNIB を訪問し、公共政策部長の方の話を伺った際に、イギリスでは障害者に対する援助が進んでいることを知りました。具体的な支援の内容として、「視覚障害者の家庭を訪問してパソコンや補助具の使用法の指導をすること」や、「支援機器の貸し出し」や「資金援助」などがあります。

日本にも障害者年金制度はありますが、家庭を訪問しての指導などはまだまだ広まっていないため、イギリスの障害者支援が進んでいることに大変驚き



ました。

二点目は、イギリスの文化です。私は、この研修の参加目的の一つに、イギリス文化に体全体で触れて日本との共通点や違いを学びたい、ということがありました。この研修では、様々な職業の人に出会い、母国語ではない英語を使って話し、異なる文化の人々と関わることなど、日々の一つ一つの出来事から、日本との違い

を感じる事が出来ました。具体的に思ったことは、イギリス人は思ったことや感じたことがあると、すぐに相手に言葉で伝えます。ホームステイの時、日本から持ってきたお土産をホストファミリーに渡すと、“Cool!” とほめてくださったり、日本の学校について説明すると、疑問に思ったことをすぐに質問をしてくださったりと、自分の思いを率直に相手に伝えていることに気がつきました。私は、英語で自分の思いをはっきりと伝えることの大切さを学び、同時に、はっきり伝えるだけではなく、相手を思いやりながら伝えることの重要性を実感しました。

文化面での発見では、食文化が印象に残っています。イギリスの伝統的な料理であるフィッシュアンドチップスや、パエリア、クスクスといった各国の料理を通して、イギリスには様々な人種や国籍を持つ人が集まり、国を発展させていることを感じました。

三点目は、インクルーシブ教育についてです。ケイ先生の講義で、イギリスにおける障害者教育制度について学びました。イギリスでは40年ほど前から、インクルーシブ教育（障害者を一般校で教育する制度）が始まっていることや、視覚障害者の生徒には週に一度、専門の先生が学校でパソコンを教えることなどもサポートをしていることを知りました。日本では今、障害のある生徒を一般校でどのように教育していくのかが議論になっています。イギリスではインクルーシブ教育が国全体に広まっていますが、重度の重複障害を持つ子供を一般校でどのように支援するかという新たな問題もあるということも学びました。日本の障害者教育も、これからどのようにして発展させたらよいか、私たちが深く考えていかなければいけないと感じました。



この研修では、多くの人に出会う機会があり、たくさんの方から多くのアドバイスを頂きました。毎日色々な方から多くの話を聞き、優しい言葉をかけて頂き、たくさんのお影響を受けたので、10日間がとても短く感じられました。また、英語で話したり、お店

で食事をしたり、街中を歩いたりという、外国で生活してみるという一つひとつの体験が、全て自分の自信に繋がったように感じています。研修に参加する機会を頂けたことは、私の大きな財産です。この研修で学んだことをこれからの糧にして、人や社会に貢献できる人間になりたいと思っています。そして、自分の目標に向かって、諦めることなく頑張っていきたいと心に決めています。

引率のスタッフの皆様、ダスキン愛の輪基金の皆様をはじめ、たくさんの方にお世話になり、本当にありがとうございました。私を大きく変えてくれたこの研修が、これからも続いていくことを願っています。

4) 廣田 成美



今回の研修で本当にたくさんのご経験をさせて頂きました。

まず、1番に感じたことが英語の魅力と大切さです。私の夢でもある「フロアバレーを日本で普及させ、そして世界で広める」ためには、より多くの人に発信しなければなりません。そのためには英語という言語のツールが不可欠です。

そして、ホームステイや野外活動などを通して現地の人と英語を話すことで、英語の魅力を感じ、英語の学習の意欲も高めることができました。

この研修では視覚障害への支援や教育に関する講義をたくさん受けることができました。その中で「障害者のため」だけでなく「みんなのため」という新しいノーマライゼーションの考え方を知ることができました。例を挙げると、「大学の講義のオンライン化」です。これは、授業についていくことが難しい障害を抱えた学生のためだけではなく、学習の振り返りをしたい学生全員に役に立つシステムです。

このような「障害者のため」だけではないシステムの考え方が、障害のある人、ない人が分け隔てなく共存を図るための第一歩に繋がると思います。

そしてその「共存」をテーマに私がこれから進めていきたいことが、インクルーシブスポーツの普及です。インクルーシブスポーツの魅力は、障害のある人とない人が一緒になってプレーでき、お互いに支え合って成り立つスポーツだということです。そしてスポーツは人との繋がりを増やし、生きがいも持たせてくれます。そのために、私が今取り組んでいるフロアバレーボールを発信していきたいです。

日本大使館では、一等書記官の方やノエルさんに「発信の仕方」という点でお話をお聞きすることができました。お話を聞く中で SNS の活用や見ている人のインスピレーション

が湧くような「楽しんでもらえる伝え方」が大事だということがわかりました。私はまだ、どのように発信していけばいいのか模索している中ではありますが、まず、より多くの人に伝えるため、英語を身につけることや新しく SNS を始めてみることにしました。これからもたくさんの人にヒントを頂きながら自分のできることをしていきたいです。

ノエルさんにも「できないことをどうやってできるようにするか考えることが大切」と言って頂けたので、私もまずは行動することから始め、地道な努力を続けていきたいと思っています。

この研修ではたくさんの方のお話を聞き、その方の考え方をすることで、私自身の研修の目的にあった「世界観を広げること、将来の選択肢を増やすこと」ができました。そして、人との繋がりを大切にする、繋がりを増やすということが大切だということにも気づくことができました。

このような貴重な機会を与えて頂いた私は本当に恵まれています。このような経験ができたのも、全て、ダスキン愛の輪基金の皆様、研修の資金を募って下さった方々、そして十日間私たちの近くでたくさんのサポートを下さったスタッフの方々、現地で私たちを迎え入れてくれた方々、家族、友人のおかげです。必ずこの経験を糧にし、人のためになる人間になれるよう頑張っていきます。本当にありがとうございました。



8 研修のまとめ（引率スタッフ）

1) 青島 優

今回初めてダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業（第 39 期）の引率として参加させて頂きました。私の主な役割は、医師として研修生の健康管理等を中心に、他スタッフと共に引率することでした。

研修へ旅立つ前に、研修生各々の健康診断書をチェックし研修可能であることを確認しました。さらに任意で、食物アレルギーなどのアレルギー性疾患の有無や原疾患に関しての薬剤の情報、飛行機などで移動する際の留意事項などの情報を提出してもらい、研修に臨みました。研修中、感冒様症状を認めた研修生がいましたが、健康上の大きな問題はありませんでした。しかし、研修が進み疲労度が増すにつれて、健康診断書や事前情報にては未確認であった治療中の疾患の存在と状態変化を認め、事前にもっと詳細に情報得るべきであったと反省しています。また、研修中は毎日健康管理表を用いて、毎日の身体状況の情報を入手し役立てることができました。

今回の研修では、各々の研修生の日々成長する姿を間近で見ることができ（特にホーム

ステイ後)、とても感慨深くまた勉強になりました。若い力が様々な困難に打ち勝ち、将来必ずリーダーシップを発揮し、社会へ貢献すると確信しました。

今回の研修では、研修生一人ひとりが大きな問題もなく充実した研修を行うことができましたと思います。今後、このような機会を再度与えられ少しでも協力できれば幸いです。今回参加された、近藤さん、坂本さん、野呂さん、廣田さんの今後の発展を期待します。また初めて参加した私に対して力添えを頂きましたことを、青松さんを始めとした引率スタッフの皆さんに感謝申し上げます。

2) 石川 英司

第 36 期の研修に引き続き 2 回目の参加となりました。私は主に移動補助の他通訳を担当するスタッフの一員として同行させていただきました。総じて言えることは、今回の研修が研修生にとって非常に有意義であり、英国での視覚障害者教育や障害者支援の現場から



からは多くの学びが得られるということです。また私は、様々な場面において、研修生たちが意欲的に研修に取り組む姿勢に大きな感銘を受けました。研修生たちは、事前に設けた目標を念頭に、野外活動や異文化交流パーティーでは積極的に行動し現地の人々と親睦を深めました。講義や見学では英語で自発的に発言や質問をしました。とりわけ印象的だったのは、出発時に成田空港で初対面した時からは想像できないくらいの積極さで現地の人々と交流していたことでした。また彼らは、様々な体験について直接的な感想を述べるにとどまらず、その体験を踏まえて今後どのように行動していくべきかという視点も備えていました。ほんの 10 日間ではありましたが、参加された研修生たちの成長を間近で見ることができ本当に貴重な機会となりました。研修生たちの今後の活躍を願ってやみません。

3) 佐藤 紀子

研修生に最初に出会った時、私は「おとなしい子供たち」という印象を抱きました。しかし、研修を通じて、日を追うごとに大きくなっていく声、輝いていく笑顔、日々変化していく研修生の様子を目の当たりにしました。日本に帰る前日、学生寮のダイニングルームで夕食を摂りながら、研修生一人一人が、印象に残ったことや感想を述べてくれました。自信に満ち、生き生きとした姿は最初の印象とは全くの別人でした。

一人の研修生が「研修内容はもちろんだが、人と人とのつながりの大切さに気づけたことが一番印象に残っている」という感想を述べました。まさにこのダスキンの研修は人と人とのつながりで成り立っていると思います。オールダムでの研修は Kay Wrench 先生、Ian Wrench



先生ご夫妻の献身的な協力を得て成り立っています。研修生たちが様々な趣向を凝らして日本の文化を伝えた異文化交流パーティーには、地元の関係者がなんと 50 名近く参加してくれました。今回初めて取り入れられたスコーンづくり体験の先生、ホームステイ先のご家庭、すべて Wrench 先生ご夫妻のご友人です。ロンドンでは前回の研修に続き、パラリンピックメダリストの Noel Thatcher さんのお話を日本大使館でうかがうことができました。人と人とのつながりという、とても大切なことに気づいてくれたことをとても嬉しく思いました。

私は、研修の準備段階から青松実行委員の事務的な手続きを手伝って来ました。青松実行委員は自身が視覚障害当事者であるがゆえ、視覚障害のある研修生達が、より多くの学びを得られるようにと配慮のいき届いたプログラムを企画しています。研修生の希望を少しでも叶えてあげたいと、自身の仕事の後にイギリスの関係者とメールのやりとりをする姿には頭が下がる思いでした。そのような後ろ姿を研修生達もしっかりと見てくれていたものと思います。

ジュニアリーダー育成研修の引率も今回で 3 回目となりました。1 回目の引率では初めて顔を合わせるスタッフ、初めての訪問先…何から何まで初めての戸惑いの中で必死に役割をこなしていました。2 回目になるとだいぶ勝手もわかってきて、少し余裕が生まれました。そして、3 回目となる今回、集大成ともいえる最高のプログラムを展開できたように思います。複数回引率を経験しているスタッフに加え、青島医師も同行してくださり、大変頼もしく感じました。素敵な研修生、信頼できるスタッフと過ごす 10 日間は私の宝物となりました。

4) 松崎 茜

36 期に引き続き、引率スタッフとして参加させて頂きました。今回の研修生も大変志が

高く、知識欲に満ちており、10日間で大きな成長をして帰国いたしました。支援下さっているダスキン愛の輪基金に感謝申し上げます。また、そんな研修生の感動や成長を間近で見られることは、大変嬉しく、とても意義があることに思います。

本プログラムには、様々な体験が盛り込まれています。

まず、インクルーシブ教育についての講義、視覚障害当事者のお話、専門家による支援機器の紹介など、視覚障害についての知識を得られるプログラムが組まれています。これは、一般的な海外留学プログラム等では経験できない貴重なものです。研修生は、慣れない英語を懸命に聞き取り、時間を惜しんで質問をし、理解を深めていました。

また、炭鉱博物館見学、ホームステイ、タッチ・ツアー、ロンドン市内散策など、一見視覚障害に直接関係する学習に結びつかないように思える体験も多く採り入れてあります。私は、どれもよい経験になるとは思っていましたが、研修生が一体何を学び取るのか想像が付きませんでした。しかし、研修生は、小さな体験ひとつひとつから新たな発見をし、吸収していきました。

例えば、研修生の一人が大英博物館のタッチ・ツアーの後、「触らせてもらった像はどれも思ったより欠けていて、発掘されたものというのは不完全なものが多いのだなと思った」と言いました。私は、像の形を手で読み取り、話を聞くことのほかに、短時間でここまで考えを深めたことに大変驚きました。

海外は、刺激的です。言葉、文化、慣習、考え方…全てが異なり、新鮮です。そんな環境の中に10日間滞在し吸収したことは、彼らのかげがえのない財産になると確信しています。

最後に、視覚障害を抱えた生徒たちは、自分の将来に少なからず不安を抱えています。イギリス研修で出会った視覚障害当事者の方々は、研修生を前向きな言葉で励まし続けました。研修生が今後、視覚障害をハンディキャップに感じることなく進み続け、また、自分だけではなく周りの友人達も励まししながら、よりよい社会の実現に貢献することを願っています。



5) 宮崎 晶子

第 39 期 ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業に、引率スタッフとして参加させていただき英国を訪問しました。参加するたびに感じる事は、生徒の皆さんがこの研修期間中に大きく成長されるということです。

本研修を通じて、英国におけるインクルーシブ教育や視覚障害者の雇用環境、また英国の文化や生活様式を体験できるだけでなく、オールダムというのどかな田園風景から、ロンドンという大都市やケンブリッジという中堅都市での生活を体験でき、各分野の最前線で活躍する先生や職員、先輩方との触れ合いを通じて、学生の皆様もより将来の自分の夢をしっかりと描くことができたのではないかと考えます。

また、英国での生活習慣や文化を吸収するだけでなく、オールダムでの日本文化交流では、書道、折り紙、そろばん、かるた、日本食紹介など各自が工夫をこらしたプレゼンでしっかり日本文化を英語で紹介。日々の交流を通じて、発言する姿も日々自信をましていくのが印象的でした。

弱視のパラリンピック金メダリスト選手はこう語ります。「自分を信じて絶対あきらめない」ことが重要だと。そんな先輩方の強い言葉や励ましのメッセージを受け、日々の課題を自分たちで克服していく姿は、海外経験を通してグローバルな視点を得るだけでなく、今後の彼らの人生に大きな意義をもたらすのではないかと感じました。

青松先生の素晴らしいリーダーシップのもと非常に多くの方々に支えられた本研修が、これからもたくさんの学生の皆さんに様々な学びを与える機会であってほしいと心から願います。最後に、今回もスタッフとして、素晴らしい研修に同行できましたことに、公益財団法人ダスキン愛の輪基金、同行スタッフの皆様、イギリスでの受け入れをくださったレンチ先生をはじめ多くの方々、その他支援して下さったすべての皆様、そしてこの素晴らしい研修をリードして下さった青松先生にお礼と感謝を申し上げます。



9 おわりに

青松 利明

研修全体のアドバイザーとして、研修生・スタッフの全員が大きな病気や怪我もなく、無事に帰国できたことに安堵しております。また、ハードスケジュールにも関わらず、全員がすべてのプログラムに参加することができ、充実した時間を過ごせたことをうれしく思います。研修が進むにつれ、研修生の声が大きくなり、発言が増え、ますます積極的になっていったことにはスタッフ全員が驚きました。

ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業の実行委員として、このようなジュニア研修を企画・実施することは、私の希望でもあり夢でした。それは私自身が高校時代に1年間アメリカに留学し、異文化の中で生活・学習をすることで、その後の生き方を左右するような大きな刺激を受けたからです。今回は3年ぶりとなる3度目の研修でした。短期間ではありましたが、各研修生のまとめを読むと、彼らが様々なことを学び、大きなインパクトを受けたことが伝わってきます。

高校生という若い世代の視覚障害者が直接異文化に触れ、同年代の視覚障害当事者と



交流し、アクセシビリティについて知り、視覚障害のある人のための最新のサービスを学ぶという体験は、彼らの将来にとって意義のあることだと思います。これらの経験を通じて、かけがえのない財産を得ることができたに違いありません。

忙しい中、参加してくれたスタッフの協力がなければ、この研修は実現できませんでした。研修生の健康管理、記録のための写真や動画の撮影、レストランの検索や選定、地図の確認、細かな会計作業、宿泊施設や飛行機・鉄道の予約、各施設との連絡・調整など、さまざまな役割を分担しましたが、スタッフ間のチームワークの良さが研修の成功につながったものと思います。

この場をお借りして、公益財団法人ダスキン愛の輪基金、スタッフのみなさま、さまざまな形で研修生を応援し送り出してくださった保護者や各学校の先生方、イギリスでの受け入れをしてくださったレンチ先生をはじめ多くの方々、その他支援してくださったすべてのみなさまにお礼申し上げます。



